Osaka University Knowledge Archive

Title	【定年退職教授の履歴および主要業績】日野林俊彦教授
Author(s)	
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2017, 43, p. 279-283
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60572
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【定年退職教授の履歴および主要業績】

日　野　林　俊　彦　教授

日野林俊彦 教授

1974 年 3 月　大阪大学文学部哲学科心理学専攻卒業
1978 年 3 月　大阪大学大学院人間科学研究科修士課程修了
1981 年 6 月　大阪大学大学院人間科学研究科博士・後期課程単位修得退学
1981 年 12 月　大阪大学人間科学部助手
1983 年 7 月　大阪大学健康体育部講師
1991 年 5 月　学術博士（大阪大学）
1991 年 12 月　大阪大学健康体育部助教授
1998 年 4 月　大阪大学人間科学部教授
2000 年 4 月　大阪大学大学院人間科学研究科教授
2006 年 4 月　大学教育実践センター（兼任）
2017 年 4 月　大阪大学名誉教授

日野林教授は、1974 年 3 月大阪大学文学部哲学科心理学専攻を卒業し、1981 年 6 月大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程を単位取得退学、日本学術振興会奨励研究員を経て、同年 12 月大阪大学人間科学部行動学講座助手に採用された。1983 年 7 月大阪大学健康体育部カウンセリング学部門講師に就任、1991 年 12 月同助教授を経て、1998 年 4 月人間科学部比較行動論講座教授に着任した。この間、1992 年 4 月からは、人間科学研究科を兼任した。2000 年 4 月には大学院重点化に伴い大阪大学大学院人間科学研究科教授（行動生態学講座比較発達心理学分野）となった。大阪大学、人間科学研究科、人間科学部の発展に尽力し、2017 年 3 月 31 日限り定年退職するものである。この間、長年にわたって真摯な態度で大阪大学の学生の教育と研究に従事し、多くの後進の育成に携った。

同人の主な研究領域は、思春期・青年期に関する発達心理学である。なかでも、いわゆる発達加速現象に関しては、我が国における数少ない研究者として独自の立場を築いてきた。この発達加速現象に関わる研究は、大阪大学文学部心理学研究室時代に開始された研究として知られており、本研究の中核ともいえる大阪大学における全国初潮調査は過去、3 年から 5 年間隔で 14 回の調査が実施されてきた。本調査は累計 314 万人に及ぶ世界にも類の無い継続的大規模調査であり、調査協力校を 47 都道府県から無作為抽出する等、毎回、莫大なる労力を必要としている。同教授は 1977 年の第 5 回調査より本研究に参画し、1982 年の第 6 回調査から 2015 年の第 14 回調査まで精力的に主導してきた。本調査により、日本における初潮を指標とする性成熟の発達加速現象の進展と停滞、更なる低年齢化、発達勾配現象としての国内地域差、さらには日本女性の性成熟の世界的な低年齢を確認してきた。初潮年齢は、思春期開始年齢等様々な意義を持つ発達指標であり、他に類を見ないため本調査の結果は心理学

や助産学等の教科書にしばしば引用されている。同教授は、この初潮年齢を指標として、思春期心理や健康行動等との関係を分析、男子精通現象との比較も含め、その発達心理的意義を明らかにされてこられた。さらには、系統発生の視点も取り入れられ、性成熟の進化発達心理学的意義も明らかにしてきた。同教授はこの発達加速現象の、いわば比較発達心理学的研究に大学院時代より一貫して従事するとともに、大学進学における満足感、性意識、性教育論、乳幼児の行動発達、低出生体重児の学齢期検診等、広範囲な領域に研究を展開し成果を挙げてきた。とりわけ、幼児の向社会行動に関わる共同研究「2 歳児による泣いている幼児への向社会的な反応：対人評価機能との関連性に注目して」は発達心理学研究に掲載されるとともに、2016 年に第 23 回日本発達心理学会賞を共同受賞し、第 9 回大阪大学総長による表彰を受賞した。

大阪大学内では、健康体育部時代には学生相談室カウンセラーも兼任し、1991 年 4 月から 1998 年 3 月までは学生相談室長をつとめ、人間科学部着任後は 2006 年 4 月から 2 年間、大学教育実践センターを兼任するなど、学生・院生の心理的援助活動や共通教育の運営にも貢献した。人間科学部内では紀要編集委員長、障害学生修学援助委員長、行動学系研究倫理審査委員長等を務められた。学外においては、日本心理学会常務理事、理事、代議員、日本発達心理学会常任理事、学会賞選考委員長、発達心理学研究常任編集委員、企画委員（監事）、日本青年心理学会研究委員、関西心理学会委員等を歴任し多数の学会運営に寄与・貢献した。日本心理学会第 74 回大会副委員長、日本青年心理学会第 23 回大会委員長をつとめるとともに、第 31 回世界心理学会議（ICP2016）では 6 年間にわたり組織委員、実行委員、財務委員長をつとめ、日本の心理学の国際化に寄与した。同教授は、臨床発達心理士認定機構の資格認定委員会副委員長として臨床発達心理士資格の普及、日本性教育学会理事としては研究成果を情報発信しつつ性教育の普及にもつとめた。日本心理学会の高校生のための心理学講座でも講師として、心理学の普及にもつとめた。一方、社会活動として、独立行政法人日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員をつとめるとともに、財団法人千里ライフサイエンス振興財団の企画委員として、自然体験学習会および小学生サイエンススクールのコーディネーターをつとめられ、児童の自然体験学習や科学理解にも寄与した。

以上のように、同教授は大阪大学および人間科学研究科・人間科学部における教育、研究、運営を通じて、その充実と発展に寄与するとともに発達心理学、青年心理学、性教育等を含む学際的研究を通じて、学術振興に大きく貢献されている。

主　要　業　績

著書

1.『青少年の生活モラルと性関連モラル』文進堂. 1981 年
2. 青年心理学からみた人間理解、前田嘉明編著『心理学と人間理解』ブレーン出版. 1985 年
3.『心理面からみた性教育』大阪教育図書 .1991 年
4. 思春期の心理、『性教育マニュアルー性教育の実践と理論』追録第２号.　大成出版社、1992 年
5. 発達、白樫三四郎編『現代心理学への招待』ミネルヴァ書房. 1995 年
6. 心身の発達からみた性の問題行動『子どもをとりまく問題と教育 10、性の問題行動』開隆堂 2003 年
7. 青年と発達加速、南　徹弘編『朝倉心理学講座第 3 巻　発達心理学』朝倉書店. 2007 年
8. 性的発達、日本青年心理学会企画『新・青年心理学ハンドブック』福村出版. 2014 年

他 17 冊

学術論文

1. 大学への進学決定過程と悩みー大阪大学における調査をもとにー『青少年問題研究』34 号, 1-17. 1985 年
2. 今の子どもの性的な成熟、『現代のエスプリ』第 309 号、54-65. 1993 年
3. 日本における平均初潮年齢の動向ー第８回全国調査より－『日本性教育学会誌・性と教育』vol.10.1-8. 1994 年
4. ヒト性行動の歴史的変化『臨床精神医学』vol.30.735-738. 2001 年
5. 思春期・青年期の性と性教育、『教育と医学』54 巻 2 号 4-11. 慶応大学出版 2006 年
6. Gender acceptance and menarche. In Zukauskiene, R.(ed.) *Proceedings of the 14th European Conference on Developmental Psychology*. Pianoro, Medimond., 7-10. 2010 年
7. 2 歳児による泣いている幼児への向社会的な反応 : 対人評価機能との関連性に注目して、『発達心理学研究』23(1): 12-22. 2012 年
8. Preschool children' s behavioral tendency toward social indirect reciprocity. *PLoS ONE* 8, 1-10. 2013 年

他 55 報